



TITLE:

関連論文集：学生のコミュニケーションを育てる教養教育実践

AUTHOR(S):

大山, 泰宏

CITATION:

大山, 泰宏. 関連論文集：学生のコミュニケーションを育てる教養教育実践. 京都大学高等教育叢書 2004, 18: 140-141

ISSUE DATE:

2004-03-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53976>

RIGHT:

学生のコミュニケーションを育てる教養教育実践

大 山 泰 宏 (京都大学高等教育教授システム開発センター)

1. 変わりつつあるキャンパスのコミュニケーション

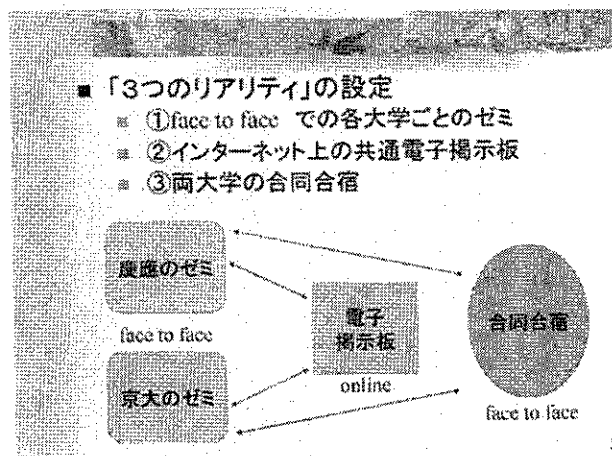
大学のキャンパスにおけるコミュニケーションが、高度情報化社会の到来により大きく変わりつつある。大学の授業においては、オンラインコースが開設されたり、バーチャルユニバーシティが実現化される中、教育・学習環境が変貌を遂げつつある。

また、メディア環境が、学生の心理や存在形態に与える影響も無視できない。インターネットや携帯電話の急速な普及などは、コミュニケーションのありようやスタイルを変化させるばかりでなく、その中で生きている私たちの心のあり方をも、必然的に変化させている。

このなかで、学生に生じている変化に関する私見を要約すれば、1) リアリティの混乱、2) 状況依存的な自己感、3) 軽度な解離、ということになる。テレビから流れてくる情報、携帯電話によってもたらされる人間関係は、身体を携え存在している「今ここ」のリアリティの中に、自分の身は届かないが心を碎かざるをえない「どこか」のリアリティをもたらす。せわしなく寸断される「今ここ」は、それが持っていた手応えを失っていく。このことは、学生の自己感に大きな影響を与えている。「今ここ」の自分の感情の連続性や流れに身を任せ味わうことは許されず、必然的に「自分」という感覚は、孤独の中で見いだされるものではなく、誰か何かとの関係に対する反応としてしか見いだせなくなる。このように状況依存的な自己感が形成されるならば、場面場面でバラバラの自分しか存せず、連続性がない感覚に苛まれるのも、当然だといえよう。

2. 教養教育の課題と KKJ 実践

京都大学では「高度一般教育」という理念を、教養教育としての全学共通教育の理念として掲げている。これは、学生個々人がこの世界の中で自分なりの世界観や自己観を持ち、主体的に生きるための知や態度を涵養するということに、重きを置いたものである。この理念に基づくならば、現代の学生が生きているこの情報化社会、ネットワーク社会を、よく生きるための教育的な関わりが求められるのである。



その問題意識のもと、京都大学高等教育教授システム開発センターと慶應義塾大学総合政策学部との協働で、実験的に行われた教育実践がある。(Keio-Kyoto Joint Project の頭文字をとって、KKJ 実践と呼ばれる。) ここでは、左図に示すように、それぞれの大学で個別に展開される通常の face to face のゼミが、インターネット上に開設された電子掲示板を通してオンラインの交流を続ける。そして学期の最後には、それぞれのゼミの学生が、はじめて face

to face で対面する合宿を体験するのである。すなわち、学生は、①個別ゼミでの対面的リア

リティにおける他者とのコミュニケーション、②電子掲示板を通して表れる、オンライン上の自ゼミもしくは他ゼミの他者とのコミュニケーション、③合同合宿における他ゼミの他者との対面コミュニケーションという、3つのコミュニケーション環境に置かれることとなる。学生は、この3つのコミュニケーションの差違に直面し、他者の現れ方、自己の現れ方、自己が他者に対して形成するイメージ、他者が自己に対して形成しているイメージ等を突き合わせ相対化し考えていくこととなる。

3. KKJ実践からの知見と展望

KKJ 実践からは、オンラインを交えたコミュニケーションに関する、いくつかの興味深い結果が見られた。例えば、オンラインでは、大学のステレオタイプイメージが、個人イメージに強く反映されることがわかった。しかも、ネットワーク上の他者に関して得られた新しい情報も、当初のイメージを変えるのではなく先入見を補強するように解釈され意味づけられるという現象が見られた。すなわち、オンラインでは先入観にもとづき他者イメージが形成され、それは修正されにくいのである。

ところが合宿による face to face の接触後は、相手イメージが大きく変化した。合宿後のアンケートでは、37 人 32 人 (88%) が「相手のイメージが変わった」と答えている。その理由として、①先入見への気づき：「相手に会って一人一人と話すと、これまで自分の持っていたイメージが偏見だと分かった」②同質性への気づき：「実は、自分たちと変わらないんだな、と思った」③多様性への気づき：「一人一人違うんだなと気づいた」などに分類された。このように、オンラインで形成していた対人印象と、対面コミュニケーションでの対人印象との差異を体験し、オンラインネットワーク上での自分の認知のあり方を反省化したり、そこでの振る舞い方の責任性などについて、考えていくこととなった。

また、インターネット上での対話においては、他者はその他者としての豊かな姿を失い「自己の否定」という単純化された意味をもって、まずは現れてくるということもわかった。オンライン上では、他者が異なる意見を出すと、それは自分の意見への反論として受け取られやすい。対面の場のように、異なる意見を出し合いながら対話を進めていくこと、すなわち、多様性を尊重しつつそこからの創造的な展開を期待することは、意外と難しいということがわかった。

このような、ネットワークを取り入れた授業に固有に生じてくる難しい問題も指摘された。たとえば、授業の枠をどこで区切るのかが難しい問題であった。学生は真夜中でも、授業で用意された掲示板で議論をおこなう。そこでの様々なトラブルに対して、授業者がどこまで介入して責任を持つべきかということは、なかなか解決のつかない問題であった。また、KKJを実施していた3年のうちに、電子メールやインターネットでのチャットが日常化し、携帯電話の急速に普及するなど、学生の日常生活が大きく変貌した。このことは、学生のオンライン環境への過度の順化をもたらし、学生たちは、ネットワーク上での認知と対面での認知を統合しようとはせず解離させたままであるという傾向が強くなってきた。

このような反省と変化を受け、学生が現在自分たちが置かれているコミュニケーション環境を意識化・反省化していくための、オンラインと対面のコミュニケーションを組み合わせた新たなプロジェクトを計画中である。